

ではないかと言われている。

亡羊の学問は決して新しくなかつたが、新旧の多彩な人材を養成し、幕末の転換期に一定の対応をみせている。さらに門人の分析を進めて、つつ込んだ再評価をしたい。

(大垣工業高校)

## 石川玄常について

津 田 進 三

「解体新書」の刊行は、ひとり日本の医学史のみではなく、文化史全体の上からみても画期的な出来事であった。そしてこの解体新書の本文各巻のはじめには、いずれも

「 若狭 杉田玄白 翼 訳

日本 同藩 中川淳庵 鱗 校

東都 石川玄常 世通 参

官医東都 桂川甫周 世民 閱」

と、四人の名前が連記されているが、このいわば著者グループのうち石川玄常についてのみは、何故か「蘭学事始」にその名が全く記されていない。そのためか石川玄常は他の三人にくらべて余り知られておらず、その研究も少ないようであって、従来太田錦城撰の墓誌銘(呉秀三「中外医事新報」昭和四年、岩崎克己「掃苔」昭和十五年)が殆んど唯一の資料とされているので、そのほか現在までに知り得たこ

との若干をご報告申したいと思う。

延享元年（一七四四）二月二八日八人兄弟の末子として出生。字子深、一字玄常、号愚岡。（墓誌）。尚出生地は江戸深川佐賀町という（田中幸一「日本医事新報」昭和一六年）。

宝暦六年（一七五六）一三歳で父を失い、母は彼を憎にしようとしたが、固く医を志して翌年医官熊谷無術に師事した（墓誌）。

明和九年（一七七二）六月一六日京の山脇東門に入門した（「京都の医学史資料篇」所収「山脇八人帳」）。（年二八歳とある）。

安永初年（？）既にして前野蘭化が江戸に西洋医学をおこしたことを聞き、急ぎ江戸へ帰って蘭化に入門した（墓誌）。

安永三年（一七七四）八月「解体新書」が刊行され、巻頭に「石川玄常参」と記された。更に凡例には「所<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>説之書目」として玄常所蔵の「米私計爾解体書」があげられたが、玄常がドイツ語を解したか否かは不明である。尚同じく山脇東門所蔵の「昔私林牛私解体書」も恐らく玄常の仲介と推定される。

天明六年（一七八六）九月小石元俊が江戸に出て大槻玄沢宅に泊り、玄常らと交遊した（「先考大愚先生行状」）。尚著作年月日は未詳の小石元俊の「経験方録」（石川県立郷土資料館蔵）には、玄常からの伝方として「爵金湯」など五つの処方<sub>レ</sub>が記されている。

天明七年（一七八七）杉田玄白の「鷓齋日録」に「二月二四日夕石川振舞」とある。

天明八年（一七八八）一橋治済（將軍家齊の実父）の待医となつた（墓誌）。尚この頃一橋家とは杉田玄白（水野為長「よしの冊子」）や桂川甫周（今泉源吉「桂川の人々」）らが既に密接であつたが、推挙の有無は不明である。またこの年の一関藩医佐々木潜庵（佐々木仲沢の師）が玄常に入門して蘭学を学んでいる（大槻如電、佐藤榮七「日本洋学編年史」）。

寛政六年（一七九四）五月玄常は子の玄徳と共に長崎屋に蘭人を訪問した（大槻玄沢「西賓対晤」）。尚石川玄徳の「西賓対話」（広島大学旧蔵）は失われたようである。

寛政八年（一七九六）「芝居見立番附」が作られ、玄常は狂言作者三枚目の高い位置にあげられた（岡村千曳「紅毛文化史話」）。

寛政一〇年（一七九八）三月玄常父子はまた蘭人を訪問したが、大槻玄沢らとは別行動のようである（西賓対晤）。

一月三日夜石川宴（鷓齋日録）。一月二六日おらんだ正月席上の「相撲見立番附」で玄常は行司に、玄徳は東小結にあげられた（紅毛文化史話）。

寛政一一年（一七九九）九月杉田玄白は酒井家世子の診察を小石元俊と玄常に依頼している（山本四郎「小石元俊」）。

享和二年（一八〇二）三月玄徳はまた蘭人と対談したが、玄常は未詳（西賓対晤）。この年三月一三日から杉田玄白は「薩摩風」にかかって重態となり、玄常の治療（回陽返本湯）などをうけた（鷓齋日録）。尚玄白はこの年一月「形影夜話」の中で従来の漢方の軽視を反省している。（日本思想大系「洋学上」）。

享和三年（一八〇三）一橋公が大病にかかり、玄常の医治が奏効して賞された（墓誌）。

文化三年（一八〇六）三月二〇日杉田玄白は小石元俊宛の書簡で石川玄常門人の吉田玄庵を紹介している（片桐一男「杉田玄白」）。

文化一二年（一八一五）一月八日玄常は七二歳で没し、

深川靈巖寺に葬られた（墓誌）というが、松林院（東京都江東区三好一―四―一四）にある玄常の墓石（関東大震災のあと昭和六年六月再建）には「愚岡院輝誉浄晃居士、文化一二年二月四日」と刻されていて命日が一致しない。その理由は未詳である。

玄常には上原氏との間に三女があり、長女に養嗣元混を迎えた（墓誌）が、文化年間の武鑑（編年江戸武鑑）には「石川玄常（両国薬研堀）、石川玄徳（父玄常同居）」とあるので、玄徳と元混とは同一人と思われる。尚玄徳には「星野医譚」（京都大学富士川本）があり、吉雄幸作や蘭人篤員別（而摩などの名も見えて、明らかに蘭方も用いている。石川玄常の医学は「一家の学に偏せず」（墓誌）との主張から漢蘭折衷と思われるが未詳で、博雅の御示教を切望する次第である。

（静岡鉄道病院）